

# 僕のパーティーが修羅場すぎて 世界が救えない

上田ながの  
挿絵／高瀬むう



立ち読み版

## 登場人物紹介

セレスティア

職業：勇者

天界の神に選ばれた少女。もとはごく普通の村娘だったが人知を超えた力を神から与えられ魔王討伐に旅立つ。



リナリー

職業：剣士

王宮に仕える王国では右に出る者がいないほどの剣の使い手。ヤマトとは幼馴染みで面倒見の良い頼れる姉的存在。

アル

職業：司祭

国の教会で最高の神聖魔法の使い手である天才少女。無邪気な口リっ娘だが非常に聡明で勇者を助ける一員に選ばれた。



ヤマト

職業：魔術師

王宮に仕える魔術師で国内屈指の貴族の子弟。スウィーナ姫の許嫁でもある。しかし偉ぶったところのない気の優しい少年。

「ヤマトさんっ！」

彼の名を呼び、森を抜けた。

「——え？」

そして勇者は立ちつくす。視界に映り込んだのは、抱き合い、キスを交わすヤマトとアルの姿だった。

+

抱きしめたアルの唇に、自分の唇を重ねる。

「んんんっ」

リナリーのものよりも柔らかくはないけれど、瑞々しさを覚える唇の感触が伝わってきた。心と心が繋がり合う様な温かさを覚えながら、舌も差し込む。自分の精液の味と匂いがするのは少し不快だったが、不快感を超える幸福をヤマトは覚えた。アルも本当に幸せそうに瞳を閉じる。

「ヤマトさんっ！」

自分の名を呼ぶセレスの声が聞こえてきたのは、その時のことだった。

「せ、セレスっ!!」

まったくの予想外の出来事に、思わず重ねていた唇を離して彼女を見つめる。

「な……何をしてるんですか？」

勇者は瞳を見開き、呆然とこちらを見つめていた。

「え、あ……その……これは……」

あつという間に幸福感は消え去り、焦りばかりが思考を支配していく。一体何と答えればいいだろうか？ どんな答えだったらセレスを納得させられる？ 考えても答えは出でこず、あうあうと口を動かすだけで終わってしまう。

「何って……キスだよ」

代わりに答えたのはアルだった。少女とは思えない程に妖艶な表情で、セレスを見つめて妖しく笑いながら口を開く。

「き、キスって……なんで？ や、ヤマトさんにはひ、姫様っていう大事な相手が……」

答えを聞いたセレスの声音は震えていた。

「そんなの知らないよ。だってアルはお兄ちゃんのことが好きなんだもん。だからほら、こんなことだってできる。こんなの、お姫様だってやったことないよ!!」

いいながら晒されたままの肉棒にアルは触れ、軽く抜いてみせる。

「え、そ、それって……」

ここで初めてセレスはヤマトの下半身が剥き出しだったことに気付いたらしく、頬を真

っ赤に染めながら股間を見つめてきた。

「ちょ、ちよつとアル!!」

この状況は不味い気がして少女を窘めようとするのだが、アルは「いいから」とだけいつて聞き入れてくれない。

「そういうわけだから。セレスお姉ちゃんはキャンプに戻っていてよ。ほら、この辺には魔物が出て大丈夫な様に魔法を使っておいたから、敵が出て安心だしね」

「で、でも……だけど……そ、それはいけないことで……」

「何がいけないの？ アルはただお兄ちゃんが好きになっただけなんだから」

セレスの言葉など一顧だにしない。

「ほら、好きだから……こんなことだつてできる……」

情けないことに、射精を終え、しかもセレスに見られているという状況だというのに、未だ肉棒は猛々しく勃起していた。その肉棒を握りながら、アルは自らの司祭服を捲り上げ、下半身を露わにする。当然下着も脱ぎ捨てられ、未だ陰毛も生えていない秘部を見せつけた。幼い秘裂がヤマトの視界に映る。ただ、幼いながらも既に陰部は愛液に濡れ、花弁が僅かに開いていた。穢れを知らない鮮やかな桃色の陰部が、妖しく男を誘っている。

クチイ……。

しゃがみ込んだヤマトの身体に、小さな身体が跨がってきた。肉棒に手を添え、先端を

腔口に添える。

「あ、アル……それは……」

「大丈夫だよ。お兄ちゃんのことを本気で愛してるから。だから大丈夫」

もうアルはセレスを見ていない。

「……………っ!!」

この姿に限界を覚えたのか、セレスはこちらに背を向けると逃げる様に走り出した。

「せ、せれっ——んんんっ!」

放つてはおけず彼女を呼び止めようとするのだが、それを遮る様にアルがキスをしてくる。少女の舌が口腔に差し込まれた。

んちゅっ! ちゅぶちゅぶ……。

「はぁあぁ……お兄ちゃんの唇美味しい♪」

うっとりアルは呟く。

「あ、アル……セレスをお、追わないと……」

蠱惑的な姿に、見惚れそうになりながらも必死に言葉を絞り出す。しかし、少女は首を横に振りながら、潤んだ瞳を向けてくるだけでヤマトを放してくれない。

「お願いお兄ちゃん。今だけはアルを見て……。お願いだから……」

そして彼女が向けてきたのは懇願だった。愛する人を自分のものになりたい。愛する人に

自分だけを見てもらいたい——少女の心がよく分かる。

僅かではあるけれど、その小さな肩が震えている様にも見えた。

拒絶されるのが怖い。お願いだから自分と一緒にいて欲しい——そうして恐怖するアルを置いていくことなんかできない。セレスも心配だったけれど、今大事なのはこの少女だった。

「分かったよ。今日は……今日だけは君というよ」

優しく語りかけながら、小さな身体を抱きしめる。

「ありがとうお兄ちゃん。大好き」

本当に嬉しそうに瞳を細めながら、アルは腰を下ろしてきた。

みじゅつ、みじゅみじゅみじゅううつ!!

「んっく! お、大きい。お兄ちゃんのお、おちんちん、す、凄く大きいよ」

小さな蜜壺を巨棒が拡張していく。肉棒が熱液に包まれていくのを感じた。全身が燃え上がりそうな程の熱気に、ペニスが更に大きくなっていく。全身が燃え

「大丈夫? 無理しなくていいよ」

少女の身体で迎え入れられるには、自分の肉棒はあまりに大きすぎる様に感じ、気遣いの言葉を投げかけるのだが、アルは首を横に振る。

「大丈夫だよ。む、無理なんかしてないか……ら……んふああつ……ハアハアハア……そ、

それより、お、お兄ちゃんこそ大丈夫？ お、お猿さんなんだから、す、すぐに射精しなくなっちゃったんじゃない？ んんんんん」

答えながら、アルは更に腰を下ろす。股間が裂けてしまいそうな程に肉穴は拡張していき、少女司祭の全身からは汗が噴き出す。そして――

「あた……当たってるのが分かるよ……ふうふう……」

肉先が膣中の何かに触れて止まった。それは少女の純潔の証。

「本当にいいんだね？」

もう一度だけアルに尋ねると、彼女は迷うことなく頷き、自ら腰を進めた。

ミヂッ、ミヂミヂミヂイッ!!

「んぎっ！ ひ、ひぎいいっ！」

苦痛混じりの悲鳴が上がる。結合部からは破瓜の血が流れ出す。やがて肉棒は少女の子宮口に触れた。

「ハアハアハア……は、挿入ったよ……。お、お兄ちゃんのがあ、アルの膣中に……」

全身から汗を流し、止まることのない荒い吐息を漏らしながら、少女司祭は苦しげでありながらも幸せそうな表情を浮かべる。

「ああ、挿入った。アルの膣中……凄く温かくて、気持ちがいいよ」

騎乗位で繋がり合う。狭い蜜壺の締め上げは想像以上だった。肉壁が呼吸に合わせてう

ねり、ペニスを刺激する。挿入だけで射精してしまいそうな程の快楽だった。

「へへ、う、嬉しいな……本当に嬉しい」

笑いながらポロポロと涙を零す。そんな彼女が愛おしくて、優しく頬を撫で、またキスをした。繰り返し何度もアルの唇を堪能する。

ちゅぷつ、ちゅちゅちゅ、んちゅるる……。

「んふつ、んちゅう……ふちゅつ、ちゅぶ……はああ……好きい♥」

アルは小柄な肢体をヤマトへと預け、惚けた様に好きだ好きだと気持ちを重ねていく。挿入したまま、そうしてどれくらい抱き合っていただろうか？

「それじゃ動くね。アルで……いっぱい気持ち良くなってるね」

やがてアルが宣言し、自ら腰を動かし始めた。

じゅつ……ぐちゅつ……じゅつちゅつじゅつちゅつちゅつ……。

最初はゆつくりした動き。それを徐々に早めていく。

「んっ、く……ふぐつ、んっんっんっ」

腰を動かすたびに、アルの眉間には皺が寄る。

「痛いのならあまり無理はしないで。アルに苦しい思いなんかさせたくないから」

「だ、だから大丈夫だって……それに……痛いだけじゃないんだ。な、なん、か……あつ、くんんっ……こうして動いてると、何だかこの辺がキュンキュンしてくるの」

切なげな表情を浮かべつつ、下腹部に手を当てる。

「お兄ちゃんのおちんちんがここで動いてるんだって思うと、身体中が熱くなってくるの」  
告白と共に、ジュワリッと愛液が溢れ出してくるのが分かった。絡みつく少女蜜が龟头  
粘膜を通じてヤマトにも染み込んでくる。

「どう？ あ、んんんん……はあーはあーはあー、お兄ちゃん気持ちいい？」  
「ああ、気持ちいいよ」

言葉の中に嘘偽りは無い。本当に今にも射精してしまいそうだった。

「嬉しい。もつと、もつとあ、アルで……気持ち良くなってね」

この反応にアルは喜び、腰の動きをより激しくしていく。耳元で「はっはっはっは」と  
吐かれる息に、ヤマトはより興奮を高めていった。

「んっ、あっ……あっあっあっ……」

いつしか少女の漏らす声の中に、苦痛以外の響きも混ざり始める。それは間違いない愉  
悦の響きだった。

「もしかして気持ち良くなってきた？」

クイッククイックとリズムカルにくる腰の動きにペニスが蕩けそうな快楽を覚えながら、  
少女司祭に問いかける。

「う、うん……な、なんか……身体が温かくなってきた。お兄ちゃんのおちんちんを感じ

てると、凄くフワフワするの……。これが……。あつあつ……。感じてるってことなのかな？」

「そうだよ」

頷きながら、ヤマトも腰を振ってみせる。ズンツと下から膣奥を突き上げると、アルは「んひっ」と声を上げて全身を震わせた。

「い、今の凄い……。なんか、目の前が真っ白になった……」

心地よさそうにうっとりとして少女は呟く。その姿が可愛らしく、もっと彼女を感じさせた  
 位と思いい、繋がり合ったままヤマトはアルの身体を繁みに押し倒し、座位から正常位の体  
 勢に変わった。

「僕が動いてもいいかな？」

「……いいよ。アルを……。滅茶苦茶にしていいよ」

この言葉にヤマトの理性は消える。可愛すぎる少女の姿に、本能が赴くままに激しく腰  
 を何度も振った。

じゅっぽじゅっぽじゅっぽじゅっぽっ！

相手が処女を失ったばかりということを気にする余裕すらない。ペニスで小柄な肢体を  
 刺し貫く様に、ズンツズンツと膣奥を叩いた。

「あつあつあつあつ！　そ、それす、つごい！　お、奥に当たる!!　あ、アルの身体、壊  
 れちゃう！　凄すぎて壊れちゃうよっ!!」

怒濤のピストンに何度も少女の身体は上下に揺さぶられる。アルは暴れ馬に乗ってでもいるかの様に、必死にヤマトの身体にしがみついていた。痛々しい程広げられた結合部がペロリツと外側に捲れ、体液に塗れた肉襷を晒す。

グラインドと同時に、キスの雨を少女の顔に降らせた。頬を吸い、鼻の頭に唇を接触させ、額を舌で舐め、口腔を蹂躪する。キスをするたびに腔壁がキュウツと収縮し、肉棒が容赦なく締め上げられた。

「き、きちゃうよっ！ なにかきちゃうっ！！ も、もう駄目っ！ おかしくなるっ！！ 何か来てアル……変になっちゃうよ！！ 怖い！ 怖いよ！」

絶頂が近づき、アルは子供が駄々をこねる様に何度も首を横に振る。少女にとっては初めてのこたらしい。そんな彼女を安心させる様に、優しく頭を撫でる。

「大丈夫。怖くないから。身を任せて」

優しく語りかけると、少女司祭はヤマトの腰にまで足を回してきた。

「うん。お兄ちゃんがそういうなら。あ、アルは大丈夫……んっんっんっ……お兄ちゃんのこと……し、しんじ、てるか——らあっ！！」

一体何回繰り返したか分からないキスをもう一度しながら、彼女の腔奥に腰を打ち付け、子宮口に龟头を押しつける。

「んっ——っひい！ く、くるっ！！」

瞬間、アルの身体が何度も激しく痙攣を始めた。痛みを感じる程に彼女の爪が背中に刺さる。少女司祭は瞳を見開きながら、ガクガクガクツと何度も腰を前後に振った。

「あつあつあああああああああつ!!」

森中に響く様な嬌声を上げ、アルは達する。

じよぼつ、じよろろ、じよじよじよじよじよおおおつ!!

「お、おしつこ……おしつこでひゃつてるう。と、止まらない。止まらないよお」

同時に少女は全身を弛緩させながら、失禁を始めた。強すぎる快楽に膀胱に歯止めがきかないのだろう。ヤマトの下腹部が濡れる。漂うアンモニア臭と生温かな液体に、どこか心地よささえ感じた。

「ぼ、僕も射精るよつ!」

じゅずぶつ!

挿入していたペニスを引き抜く。そのままパツクリ開いたままの膣口に――

びゅぶぼつ! どびゅどびゅ、どびゅっしいいいいっ!!

射精を始めた。

「んあつ! あ、あついつ! こ、これ熱いいっ!!」

膣口に熱液が降りかかる。当然アルにとっては初めての感覚であり――

「あ、熱くて、これ熱くて……またくつる! またアル来ちゃうつ!! んんあああああ



あああああああああああつ!!」

過敏になった肉体は、すぐさま新たな絶頂に達した。

「あ、あああ……すごい……これが好き……ハアハア……ひ、人と、せ、セックス……す、するってことなんだ……」

止まることのない荒い息を吐き、脱力しながら、処女をヤマトに捧げられた感動に涙を流しつつアルが呟く。

「良かったよアル」

その少女に愛おしさを感じながら優しく声をかけ、ヤマトはその横に添い寝すると、唇を重ねた。

「んんんんん」

「……んふっ」

何度してもキスの心地良さは変わらない。心と心が繋がり合う幸福を覚えながら、愛しい少女の頭を優しく撫で続けた。

十

一人セレスはキャンプに戻る。焚き火の炎はほとんど消えてしまっていたが、リナリー

は気持ちよさそうに眠っている。

「もう食えねえじゃなくて……もつと食えよ……」

などという寝言までいっていた。

それを耳にしながら、セレスは自分の寝袋に潜り込むと、必死になって瞳を閉じ、先程の光景を忘れようと努めるのだが、ヤマトとアルの姿は脳裏から離れてくれない。

(キスしたのに……私を支えてくれるっていったのに……)

ヤマトに対する感情が渦を巻く。けれどそれは決して彼に対する恨みではない。

(私が悪いんだ。私がヤマトさんの期待に応えられなかったから、ヤマトさんはああやって私を罰したんだ。だから、だから私はもつと頑張らないといけないんだ……)

感じるの自分に対する無力感。

(そうだ。もつと、もつとヤマトさんの為に頑張らないと。私のバカ！ バカバカバカバ

カバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカ

「バカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカ

カバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカ

カバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカ

カバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカ

寝袋の中でひたすら自分を罵り続ける……。

「あの……私……役に立ってますか？」

そんなヤマトにセレスが語りかけてくる……。

+

「貴様らがデスクールを殺った勇者一行か……」

その日、パーティを襲って出現したのは、魔物だけではなかった。数十匹の魔物を従え、一体の魔族まで出現する。三つの目に、二本角、デスクールによく似ているが、翼は持っておらず、代わりにトカゲを思わせる一本の尻尾を生やした魔族だった。

「魔族……なんだってこんなところに……」

予想外の敵に緊張した面持ちを浮かべつつも、リナリーは油断なく剣を構える。

「……貴様らがガレード様の居城に近づきすぎたからだよ。貴様ら羽虫の様な存在であっても、周囲をブンブン飛び回られるのはやっかいだからな」

魔族は言葉を一言放つごとに、魔力を増幅させていく。ただの魔物などとは比べものにならない程の力を感じた。

(こいつ……デスクール以上か……)

力の大きさは以前滅ぼした魔族を超える。しかも、引き連れている魔物達の数も多い。

背中を冷や汗が垂れ流れていくのをヤマトは感じた。

「ビビッてんじゃねーよヤマト。アタシ達は今までどんだけ敵を倒してきた？ 今更この程度の相手に怯んでんじゃねーよ」

そのヤマトにリナリーからの励ましの言葉が飛ぶ。

「別にビビッてなんかないって……。ちよっと武者震いしてただけさ」

お陰で少し気分が落ち着く。こういう時には頼もしかった。

(そうだよ。負ける訳ない。こつちには頼もしい仲間がいるんだ!!)

闘志の炎を燃やし、敵を睨む。これを受けて魔族は楽しげに口元を歪めた。

「この数を相手に怯まぬか……。くく、これはなかなか楽しめそうだな……。ゆけっ！」

魔物に対して号令が飛ぶ。数十匹の魔物が一斉にパーティーに向かって飛び掛かってきた。これに対抗する様に「ハアアアッ！」リナリー、セレスも気合いを上げながら敵に突っ込んでいく。

「援護するよりナねえ！ セレスッ!! 極炎の豪雨」

撃ち放ったのは数十本の炎の矢。その名のごとく雨の様に魔物達に降り注ぐ。

「キシヤアアッ！」

これで撃破することができた魔物は全体の半分程に過ぎない。だが、それだけ倒せれば十分だった。

「遅いっ!!」

「はあああああつっ!」

二人の女剣士が刃を振るう。剣撃速度は魔物達の反応速度を遥かに上回っていた。ヒュンヒュンッと響く風切り音と共に、魔物達は次々と切り裂かれていく。

「馬鹿なっ! チイッ」

魔物を斬った勢いのまま、リナリーは魔族にまで飛び掛かっていった。これを回避する為敵は地面を蹴ろうとするのだが――

「神の茨!」

アルの神聖魔法によって生み出された魔法の蔦がその両足を拘束する。

ガギイイッ!!

「ぐっ! こ、これはなかなか……予想外だ。素晴らしい連携だぞ」

「そうかい……お褒めの言葉ありがたく受け取っておくよ」

回避が不可能となった魔族は、振り下ろされた刃を真正面から爪で受け止めた。リナリーの細腕ではこのまま力で押し込むことはなかなか難しい。

「今だセレス!!」

しかし、剣士は一人ではない。女剣士は控える勇者の名を呼んだ。この状況ではいかに魔族とて回避は不可能。

ヒュバツ!!

神速ともいえる剣撃が、魔族の肉体を切り裂いた。

「ゴアアアツ!!」

聖白銀の刃は魔力生命体である魔族の命にまで届く。敵は鈍い悲鳴を上げながら、そのままその場に片膝をついた。

「こ、これは想像以上だ……ま、まさか……この俺がこんなにあっさり……」

致命傷を受け、驚きの表情を魔族は浮かべるが、どこかその表情は嬉しそうにも見える。「何を笑ってやがる」

薄気味悪いものを感じたのか女剣士が尋ねると、敵はヒューヒューと苦しげに息を吐きながらセレスを真っ直ぐ睨んだ。

(何だあの目？ なにか……嫌な予感がする)

敵の目つきに猛烈に嫌な予感をヤマトは感じる。

「なあに……良かったと思つてな」

「良かっただと？」

「ああ……やはり俺が貴様らと戦つたのは間違ひではなかったからな。勇者……やはり危険な存在だ。き、貴様をガレード様のもとに行かせる訳にはいかん!!」

言葉と共にズンツと魔族は自らの胸に、自身の腕を突き立てた。凄まじい量の血液を溢

れ出させながら、身体の中から一個の球体を取り出す。

「俺と共にあの世へ行ってもらおうぞ……」

「なっ——!!」

魔物の腕がそれを握りつぶすと、強大な魔力が漆黒の輝きと共に溢れ出した。

（魔族の命は魔力そのもの。奴らの肉体の中心には強大な魔力を圧縮して創り出したコアがある。もしそれを潰す様な真似をすれば……）

圧縮された魔力がすべて解き放たれ、凄まじい力が辺り一帯を吹き飛ばす。あの至近距離でそんなものを受ければ、リナリーとセレスなど一溜まりもないだろう。

二人が死ぬ——考えるだけで心が凍り付きそうな程の恐怖を覚えた。

（駄目だ。みんなで帰るんだ！ 約束を守るんだあつ!!）

ヤマトは二人に向かって走りながら、自身の持つ魔力をすべて解き放つ。必ず二人を守るという思いのままに、転移魔法を発動させた。

カアアアアアアッ!!

凄まじい光が、辺り一帯を包み込む。ヤマトの視界も、真っ白に染まっていった。

「——と……まと！ ヤマトっ!!」

どこか遠くで自分を呼ぶ声が聞こえる。聞き覚えのある声だ。これはそう、姉——リナリーの声。でも、普段聞いている余裕ある彼女の声とは違う。必死に泣き叫んでいる声だった。

「ね……え、さん……」

普通に口を開くだけでも尋常でない痛みを覚えつつ、それでも口を開く。リナリーに名前を呼ばれて黙ったままにいることなどできなかったからだ。うつすらと重い瞼を開けると、女剣士の泣き顔が視界に飛び込んできた。

「ヤマトッ!! この馬鹿野郎！ 何一人で格好つけてやがるんだよ!!」

姉が怒鳴りつけてくる。ただ、こちらが生きていることを確認して、どこかホッとしている様にも見えた。

「ご、ごめん……」

苦痛に耐えながら笑う。

リナリーが無事ということは、転移魔法で敵の魔力をすべて別の場所へ移動させるという策はどうやら上手くいったらしい。ただ、飛ばしきれなかった魔力の残照がすべてヤマトの身体を打ち貫き、今の様なありさまになってしまったのだろう。命には別状なさそうだが、死ぬ程痛い。

「と、取り敢えず……か、回復魔法いいかな……」  
痛みを耐えながら頼む。

「分かってる。任せて。すぐに回復させてあげるから」

表情を歪めながら頼むと、すぐにアルが動いた。回復さえしてもらえば、この痛みともすぐにおさらばできる。ホッとヤマトは息を吐いた。

が――

「待つて。それは私の仕事です。ヤマトさんは私が回復させます」

アルの魔法は中断させられる。割って入ってきたのはセレスだった。彼女はアルを押し  
のけ、ヤマトの身体に手を翳してくる。

「ちょ――邪魔しないでよ！ こんな深い傷、セレスお姉ちゃんじゃちゃんと回復させら  
れないでしょ!!」

「これくらいできます」

これには流石にアルも怒りの声を上げたが、勇者は聞く耳を持たない。アルなど無視し  
て魔力を集中させ始める。

「ち、ちよつと、人の仕事取らないでよっ!!」

ドンツとアルの手がセレスの身体を突き飛ばした。

「キヤッ！ な、何するのよ!! 邪魔しないで！ ヤマトさんを助けたくないの!？」

バランスを崩して倒れた勇者の顔が、怒りの表情に変わる。すぐにセレスは体勢を立て直すと、アルの身体を突き飛ばした。

「いてっ！ 痛いよ!! なにそれ!? ヤマトお兄ちゃんを助けたくない？ 助けたいに決まってるじゃん！ 邪魔してるのはそっちの方だよ!!」

ギリギリと奥歯を噛み締めながら、アルは立ち上がると今度は身体を押し出すのではなく、平手打ちをセレスへと放った。パンッという乾いた音が響き渡る。

「——ッ！ こ、このっ!!」

パンッ!

これに対してセレスも同様に腕を振る。相手がまだ子供であることもお構いなしの、本気の平手打ちだった。

「む、むううっ！ この分からず屋っ!!」

これが引き金となり、二人は互いに互いを叩き始める。少女達の頬が真っ赤に腫れ上がるくらいの激しい応酬だった。

「ちよ、や、やめろよ二人共。くだらないことで喧嘩するなって」

唐突な事態に慌ててリナリーが止めに入る。

「今は子供みたいに喧嘩してる場合じゃないだろ。ほら、それより先にヤマトを助けないと。な、だからどっちか引けて」



実に大人らしい対応だった。

パンツ！

「え——へ？」

しかし、そのリナリーに対してもアルが平手を振るう。女剣士は驚いた表情を浮かべて、叩かれた自分の頬を押さえた。

「五月蠅いよ！ 一人だけ大人ぶって……リナリーのいうことなんか聞かないんだから!!」

それは少女からののはつきりとした拒絶だった。

「知ってるんだよ！ そうやって余裕ぶってるけど、リナリーだってお兄ちゃんとセックスしてたんですよ。だから、そうやって一人だけいい子ぶって、お兄ちゃんを自分のモノにしようとしてるんだ！ だけど、アルはお兄ちゃんを渡さない!!」

驚く女剣士に畳み掛ける様に怒声を浴びせかける。セレスはアルの言葉に絶句している様だった。怒りを忘れ、呆然とリナリーを見つめる。

「アルだってお兄ちゃんとセックスしたんだから！ お兄ちゃんに処女をあげたんだ!! だから……お兄ちゃんはアルのもので、リナリーにもセレスにも渡さない！ だからアルがお兄ちゃんを回復させるんだ!!」

これまで溜まっていた鬱憤をすべて晴らすかのような言葉だった。

「やだ、身体が動かないよ！」

やがては完全に搦め捕られ、まったく身動きが取れなくなっていました。

「な、何やったんだよセレス？ こ、こういう冗談はやめろって！」

「冗談？ 冗談なんかじゃないですよ。二人はそうして見ていて下さい」

これが勇者が与えられた天界の力だというのだろうか？ これまでヤマトが見てきたどの様な魔術系統にも当てはまらない魔法の様に見えた。

(つて、そんなこと考えてる場合じゃない!?)

動けなくなった二人を無視してセレスが近づいてくる。

「あ、あの……せ、セレス……？」

彼女の姿を見ているだけで、汗が流れ出してきた。恐る恐る声をかけると、勇者は慈愛の笑みを浮かべ、そつとヤマトの頭を撫でてくる。

「ようやく分かりました。ヤマトさんの本当の気持ちが……」

「ほ、本当の気持ち？」

一体彼女は何をいつているのだろうか？

「まだ私の力が足りないっていうんですね。それに気付かず……本当にごめんなさい。だけでもう分かりましたから……貴方の気持ちに伝えてみせます」

「僕の気持ちに應えるって……あ、傷が……」

語りながらセレスは回復魔法を發動させた。呪文すら唱えず、手を翳すだけで癒しの風がヤマトの全身を包み込む。身体中にできていた傷が塞がり、痛みも消えていった。

「そ、それはアルの仕事なのにいつ！」

悔しそうにアルが声を上げるが、セレスは一顧だにしない。

「どうです？ 楽になったでしょ」

「う、うん……あ、ありがとセレス。も、もう大丈夫だから」

彼女の意図は分からないが、取り敢えず礼を言い、立ち上がろうとするのだが――

「あ、あれ？ か、身体が動かない……」

今までまったく気付いていなかったが、ヤマトの肉体もセレスの魔法によって拘束されてしまっていた。

「まだ動いちゃ駄目ですよヤマトさん……。私の想いを貴方にぶつけるのはこれからなんですから」

「お、想いをぶつける？ って、それってどういう……え、あ、何か……身体がやけに熱くなってきた。え、うあつ、なんだこれ!! 身体が、というか……あ、アソコが熱い!!」

身体に変化が起き始める。全身――特に股間部が異常な程に火照り出し始めた。現在の状況、自分の意思などお構いなしに、ペニスが勃起していくのが分かる。身に着けたロ―ブを内側から肉棒が持ち上げた。

「これって、い、一体？　もしかして……セレスが何かしたの？」

明らかに異常な肉体反応。何か外的要因があるのしか考えられない。そしてこの状況でヤマトの肉体に影響を与えることができるのはセレスだけだ。

「はい」

実際こちらの問いかけに対し、勇者は満面の笑みで答える。

「気付いたんです。私がヤマトさんにしてないことが一つあったって……。だから、その為に少し魔法を使わせてもらいました……」

「ま、魔法って……いや、それよりしていいことって一体……」

一つ思い当たることはあるのだけれど、怖くて口に出せない。

「簡単なことですよ。リナリーさん……アルちゃんの人々がやっついていて、私がやっついていないことです。本当に失念しちゃってました。ごめんなさい。そうですね。ヤマトさんがどんなに素晴らしい人だといっても、男の人なんですもんね」

語りながらセレスはヤマトのローブに手をかけてくる。身動きが取れない状況では当然抵抗することもできなかった。

「ちよっ！　なにやっつてんだよ！　やめろおっ!!」

「そそ、そうだぞセレス。い、いくら何でもこんなところで……し、していいことと悪いことがあるぞ。少し落ち着け！」

もちろんリナリーとアルの二人だつてセレスが何をしようとしているのか理解する。アルは怒声を、リナリーは諭す様な声を上げた。身動きが取れないままに、必死にセレスを止めようとする。二人から向けられるこれらの言葉に、勇者が浮かべた表情は、本当に申し訳なさそうなものだった。

「……今まで本当にすいませんでした。私が至らなればかりに、二人に無理をさせて……でもこれからは大丈夫です。私がヤマトさんの面倒を見ていきますから」

「め、面倒を見るって……」

「そのままの意味ですよ。私はヤマトさんの為に敵を倒します。ヤマトさんの為に傷を治します。ヤマトさんの為に……身体だつて捧げます」

語りながら遂にセレスはヤマトの下半身を露わにする。魔法によつて無理矢理勃起させられた肉棒が、ピョンツと勢いよく飛び出した。魔力を浴びている為なのだろうか？ただでさえ大きなペニスが、更に膨張している。アルの腕くらいの太さにはなっている様に見える。肉茎には血管が浮かび出て、先端秘裂が呼吸するようにパクパクと蠢いている。

「……凄く大きいです」

頬を紅潮させながら、勇者はうつとりと呟く。

「ほ、ホントにでけえ……って、そうじゃなくて！ おいヤマト！ 分かってんだろ？ な!! 早くそれを鎮める！ このままやっちゃったら、後で酷い目に遭わすぞこらあ！」

「そそ、そうだよお兄ちゃん！　今はそれを収めて。後でアルがスッキリさせてあげるから、今は我慢して！」

女剣士と少女司祭も一瞬ペニスに見惚れる様な表情を浮かべた後、無茶苦茶な言葉を投げかけてくる。

「そ、そんなこといわれても……」

自分の意思だけでは最早どうすることもできない状況だった。

「二人ともそんなに心配しなくて大丈夫ですよ。こういうことするのはもちろん初めてですけど、村では色々話を聞いたりしてきましたから。だからしつかりヤマトさんのお役に立ってみせます」

語りながらセレスは四つん這いの姿勢となり、ヤマトの両足に跨がってくる。顔が丁度ペニスの位置に来た。ヒクヒク震える肉棒を目の前にし、流石に一瞬躊躇する様に動きを止め、ゴクリッと喉を鳴らす。

「あ、ベ……別に無理する必要はないよ。こんなことしなくても、十分セレスは僕達の役に立ってるから……」

強制発情させられた肉体は、熱くて、もどかしくて苦しい。既に女色の快楽を知ってしまったっている身体は、女を抱きたくて激しく疼いていたが、だからといってリナリーやアルの目の前でセレスとセックスする訳にはいかない。彼女が躊躇しているのなら、そのま

まやめさせるのがベストだと、必死に説得に努めた。

「いいえ、無理なんかしてません。大丈夫です。いきますよ」

が、やはりというか何というか、セレスは聞く耳を持つてはくれない。大丈夫だ、問題ない——といったニュアンスの言葉を呟くと共に、口を開いてペニスを咥え込んだ。

じゅぶぽつ！ ぶじゆるるう……。

「ん、ふむつ……んちゅつちゅつちゅつ……ふちゅうう……」

ただでさえ平均より大きなペニスが更に膨張している。セレスの小顔に対し、それはあまりに大きかった。当然口腔に咥え込むのも辛いだろうに、喉奥まで勇者はそれを飲み込んでいく。

「んごつ、ふーふーふー……んがん……」

口から漏れる声はかなり苦しげだった。だというのにセレスは止まらず、肉先を喉奥に入るまで飲み込む。吸い付くような食道の感触が、ペニスを蕩かす様で心地よかった。

「うああ、そ、それ凄い……」

仲間に見られていることも忘れ、愉悦の声を上げてしまう。これにセレスは肉棒を咥えたまま嬉しそうに瞳を細めると、口腔のペニスを舌を絡みつかせてきた。

ちゅぶつ、くちゅつ、ちゅつちゅつちゅつ……ふちゅぶるう……。

蛇のように舌が肉茎を這い回る。裏筋をなぞり、カリ首を締め上げ、肉先秘裂をなぞつ

た。ペニス全体が唾液に塗れていくのが分かる。

「んふーんふーんふー……んじゅっ、ちゅぶるる……んぐっ、ふんんん」

もちろん、口腔内で舌を動かすだけで口奉仕は終わらない。セレスは口唇で肉棒を締め上げながら、徐々に顔を動かし始めた。それは本当にゆったりとした動きであり、唇によって肉棒が潰されてしまうのではないかという程の締め付けを感じる。

じゅず、じゅずずずず……。

美しく、神秘的な美しさを持った少女が、頬を窄めて唇をタコのように突き出し、醜い肉塊を口腔から引き抜いていく。ダラダラと垂れ流れ続ける唾液は止まらない。あまりに淫靡すぎる光景だった。やがてカリ首が唇に引つかかり――

チュポントッ！

音を立てて口腔から引き抜かれる。ビョントと跳ね上がった肉棒から唾液や先走り汁が飛び、セレスの顔を汚した。

「ハアハアハア……また大きくなってます……。私の口が気持ち良かったんですね。嬉しい。もっと気持ち良くしてあげますからね……んちゅっ」

肉棒にキスをしてくる。

「うあっ」

柔らかな唇の感触に、まるで少女の様な声を上げてしまう。この反応に満足そうな表情

を浮かべながら、女勇者は何度も何度も肉棒に口付けを繰り返してきた。チュッチュッチュッチュツとキス音が響く。当然接吻だけで行為は終わらず、舌を伸ばして肉棒や陰囊を舐めてもきた。

ちゅば、ちゅるる、ちろちろちろ……。

刺激を与えられるたびに、ヤマトの身体はビクビクと震えてしまう。普段の生真面目すぎるセレスとは思えない舌の動きだった。熟達した娼婦の様ですらあり、リナリー、アルですら言葉も出せずにこの光景を見つめる。

「やばいって……も、もう……」

舌先で肉棒を弄ばれただけだというのに、今にも射精してしまいそうな程、勃起ペニスは昂ってしまっていた。

「ふふ、分かっていますよ。全部飲んであげますから……たっぷり私の口の中に射精して下さいね♥」

射精が近いことを悟ったセレスが、ニアツと口を開いて再び口腔に肉棒を咥え込む。今度は先程の様にゆったりとした動きではない。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっじゅぽっ！

肉茎を咥え、激しく首を前後に振り始めた。

「んもっんもっんもっんもっ……んちゅるるるるうっ……ふちゅっ、むちゅう……だ、

だひへ、わひゃひのくひのやかに、たくしゃんだひてくらはい♥」

ずっぽずっぽと顔を動かしつつ、時折激しく肉棒を吸引し、ペニスを啜えたまま射精を求めてくる。とてもではないが、我慢などできなかった。

「せ、セレス……いいよセレス」

状況も忘れて快楽を口にしてしまう。無意識のうちに腰を前後に振り出し始めてしまつてさえた。

「んふーんふーんふー」

突き出される肉棒を舌で味わいながら、幸せそうに勇者は口奉仕を続ける。やがて止めとばかりに肉棒を喉奥まで飲み込むと、

「んじゆるるるるるるっ！」

下品な音と共に吸い立ててきた。

「うあっ！　そ、それも無理っ!!」

限界まで張り詰めていたペニスを射精させるには十分すぎる程の快楽だった。

びゅぶぽっ！　どびゅっ、どびゅどびゅどびゅう！

膨れ上がった肉先から白濁液が溢れ出す。

「んふー！　ごきゅっ、ごきゅごきゅごきゅ、んごきゅう……」

セレスはこれをすべて口腔で受け止めると、喉を鳴らしてすべて飲み干した。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



## 二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



## ニミタクアンリアル

フェチをテーマに突き抜ける作品群!!



## Pn comic

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



## メガミクラインシス

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!  
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

# コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

## ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

## 発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



# 電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!